

会議名	公開シンポジウム 「トランスジェニック豚および鶏の開発と再生医療への利用」
開催日時	平成16年12月14(火) 10:30~17:20
開催場所	東京大学弥生講堂・一条ホール(東京都文京区弥生)
主催者	(社)農林水産技術協会(調査部)
参加人数(概数)	約百名(出席者名簿公開無し)
1. 会議の概要 (500~1,000字程度または議事内容の資料添付)	<p>情報協会が農林水産省から委託を受けて開始した融合新領域研究戦略的アセス調査「始原生殖細胞・体細胞を利用した形質転換モデル動物の作出ならびに新規医薬品等生産技術に関するアセス調査」の一環として、研究情報の収集・検討、異分野の研究者との交流を目的として開催された。</p> <p>今回のテーマ「トランスジェニック豚および鶏の開発と再生医療への利用」により、畜草研の大西チーム長をリーダーとする研究プロジェクト研究参加研究者から、別添資料のような講演が行われた。その内容としては、体性幹細胞、特にヒト造血幹細胞の測定に必要なモデル動物の現状と移植後の細胞可塑性および評価に関する知見、豚臓器に発現する異種抗原除去および免疫拒絶反応回避技術の現状と展望、遺伝子組換え技術を利用した体細胞クローン豚作出に関する最新情報、豚内在性レトロウイルスの測定技術の現状と除去法に関する最新情報、単一細胞操作支援ロボットを利用した鶏始原生殖細胞(PGC)の顕微操作における細胞の性状に応じた専用デバイスおよび技術開発の可能性の調査、鶏PGCへの確実な遺伝子導入法および培養技術に関する最新情報等について紹介された。</p>

<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表</p>	<p>クローン豚の作出はクローン牛の作出よりやや遅れたが、その研究は最近において飛躍的に進展し、ヒト移植医療における臓器供給の期待も根強く大きい。しかし、安定的なクローン豚作出技術は不十分との意見も聞かれ、基礎となるクローン豚作出技術を向上する研究開発が特に重要である。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>東京農工大学工学教育部の斉藤美佳子助教授の「単一細胞操作支援ロボットの開発によるポストゲノムサイエンスへの展開」は研究開発支援のツール開発の課題で、このような研究には必須な分野でもある。委託・助成課題の採択に際し、このような分野への気配りも必要なことを示していると思われる。</p>
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>信州大学農学部鏡味助教授による、講演番号1「鶏始原生殖細胞（PGC）の分化制御による個体再生」は平成12～13年度に当協会から委託した課題「発生工学的的手法による家畜の雌雄産み分け技術の開発」（委託金額2年間で400万円）の成果も含まれており、謝辞の中に当協会に対するものも述べられていた（この分の原著報告は別添資料7頁の参考文献5）。</p> <p>今後、公的資金を重複して受けた課題の発表においては勿論、その後の関連講演の場においても、このケースをモデルとして、畜産技術協会からの資金も受けたことを謝辞に付け加えることを指導すべきと考えられる。</p>
<p>報告者</p>	<p>針生 程吉</p>